

---

書評

---

**Glenn Hartz, *Leibniz's Final System*  
(Routledge, 2007, xvi+234p.)**

枝村祥平

---

本書は、オハイオ州立大学教授であり、*Noûs*や*Philosophical Review*といった著名な雑誌でライプニッツ(1646-1716)に関する論文を発表してきた著者が、以前の説とはまた異なった刺激的な解釈を提示したものである。なおハルツは、北米ライプニッツ学会(*Leibniz Society of North America*)より刊行されている学術雑誌*Leibniz Review*の編集委員の地位にある。

ライプニッツは、厳密な意味で存在するのは単純実体ないしモナドとそれに内在する表象及び欲求のみであると述べている(G2 270)。モナドは非物質的な実体であるとされ、物体は現象にすぎないとも述べられる。そうすると、ライプニッツの立場は唯心論ないし観念論であるとの印象を受ける人もいるだろう。しかし他方、ライプニッツは物体に力が内在することを強調している(G2 251)。ライプニッツはたびたび、マールブランシュの機会原因論を被造物から作用の能力を奪うものとして批判し、物体ですら自らの力で変化を続けるのだとする(G2 257)。このような主張は、物体を心の内なる観念に過ぎないとするバークリーの立場と大変異なったものと言わざるを得ないだろう。このように、ライプニッツは

物体の存在論的身分に関して様々な主張をなしており、それらを整合的に解釈することが課題となってきた。

ハルツは、ライプニッツのテキストが膨大で多様な主張を含んでおり、いくつかの主張は端的に両立不可能であると考えている。本書において最も重要で、かつ議論を呼んでいる主張は、ライプニッツはこれらの主張の両立不可能性を意識していた理論多元論者(*theory-pluralist*)であり、観念論(*Idealism*)と実在論(*Realism*)という二つの矛盾する形而上学の体系を仮説として同時に提示したというものである(第一章 p. 15)。

本書は序論を含めた9つの章からなっている。以下に、各章を引用しながら観念論及び実在論の体系をまとめる。観念論によれば、表象主体である人間精神はモナドの一種であり、表象主体が自分以外のモナドの存在を示すにあたっては神学的議論に頼らざるを得ないとされる(第二章 p. 49)。モナドはいずれも独立しており、他のモナドから作用をうけることはない。物体から刺激を受けて感覚をもったように思えたとしても、その感覚は自分自身のモナドから生じたものにすぎないと考えられるのである。従って、他のモナドの存在証明は、神の存在証明及び神の創造の仕方に関する議論に依存したものとなる。神は表象主体にあらわれた現象に対応したモナドを創造したので表象主体は現象からモナドの存在を推し量ることができる、という仕方ではか他のモナドの存在を示すことができないのであ

る。ここで前提とされるのはオプティミズムないし最善説である。神は最善の意志をもち、最善の世界を創造しようとする。表象主体にあらわれた現象に対応するモノダが存在しない世界よりもする世界の方が善い世界であり、それゆえにこの最善世界においては現象に対応したモノダが存在するのである。このように、観念論においては他のモノダの存在が込み入った仕方で証明される。観念論のなかでしばしば強調されるのは、物体はよく基礎付けられた現象であるという主張である(第五章 p. 80)。これは、物体は表象主体のうちの現象であるが、外的対象と何らかの対応関係をもったものであると理解することができる。しかし、外的対象自身は決して表象の内に現れることはなく、表象主体自身に作用を及ぼしてこれを触発することもないのである。観念論においても、物体を現象に対応したモノダの集合体であると考えことはできる。ただ集合体は何ら内在的統一性をもたず、表象主体によって一つのもつものと恣意的にみなされているに過ぎない(第五章 p. 92)。観念論においてはまた、魂と身体とを備えた動物は厳密な意味の実体ではない(第八章 p. 156)。魂(支配的モノダ)と身体(多くの従属的モノダの集合体)は、実際には相互に独立しており、何ら作用を及ぼしあうこともないし、実体的な結合関係ももたない(第八章 pp. 180-2)。

他方實在論によれば、他のモノダの存在を証明するにあたり神学的議論に頼る必要

はない(第二章 pp. 49-54)。他のモノダの存在は次のように証明される。眼前に表象された物体がある。物体は部分をもった複合体である。複合体があるからには、それを構成する単純体がなければならない。それがモノダである、と。實在論によれば、表象主体であるモノダは外部からの作用から全く隔離された孤立的存在者ではない(第六章 p. 127)。表象主体はむしろ、外部からの作用を受けることによって、端的に表象主体の外部に物体が存在すると知ることになる。また、モノダの集合体は観念論におけるものとは異なった扱いを受けることになる。多くのモノダは、表象主体とは独立に集合体を形成する。従って、人間精神という表象主体が意識的に表象したことのない物体が無数に存在することになる。このような表象主体から独立して存在する集合体ないし物体は、それを形成する多くのモノダから派生したさまざまな性質をもつ。物体のもつ實在性、能動性、力などはこれらのモノダがもつ實在性、能動性、力から派生したものである(第六章 p. 126)。さらに、魂と身体とを備えた動物は観念論におけるものとは異なった存在論的身分をもつ。實在論においては、動物は不可分で単純な実体であるとみなされるのである(第八章 p. 190)。

ハルツの解釈は斬新で興味深いのが、いくつかの問題点が見受けられる。第一にハルツの提示した實在論においては表象主体であるモノダが外界からの作用を受けるとさ

れているが、ライプニッツは一度としてこのような主張を明示的になしてはいない。これはむしろ、ハルツが實在論に属すると考えた主張を説明するための仮説である。しかしライプニッツ自身は神以外の存在者から独立していることを実体の要件として何度も挙げている一方で(G4 440, G5 195 etc.)、外界から作用を受けながら変化を続けるモノイドについては何らの説明も与えていないのである。そして、他の被造物の作用から独立していることが実体の要件であるのならば、物体から作用を受け続ける表象主体は実体ではなくなってしまうことだろう。

第二に、ハルツに従えばライプニッツは一つの書簡で（アルノー、デ・フォルダーといった）相手に告げずに二つの理論を交互に織り交ぜながら提示していることになってしまう(Appendix p. 207)。このような書簡の書き方は、読む相手を徒に混乱させるだけであると言わざるを得ないだろう。ライプニッツがこのような不親切で不誠実な振る舞いをしていると結論付けるのは可能な限り避けなければならないのではないか。確かに1712年以降のデ・ボス宛書簡においては、ライプニッツは明示的に実体的紐帯(vinculum substantiale)が存在する場合と存在しない場合をわけて、二つの異なった枠組みを提示しようとしている(G2 435-6, 473-4)。この場合は、ライプニッツの記述に沿って二つの（論理的には相容れない）枠組みを理解しようとすることは合理的で

ある。しかし、それ以前に交わされているデ・フォルダー宛書簡(1699-1706年)などではそのような場合だけは提示されていないのである。

第三にハルツ自身が認めていることであるが、彼はゾフィー・シャルロッテ宛書簡の一節を観念論にも實在論にも属し得ないものとして扱ってしまっている(第七章 p. 151; G7 564)。そこでライプニッツは、物質の塊(une masse de matière)は無限数の真の実体の多(une multitude d'une infinité de véritables substances)であり、かつよく基礎付けられた現象(un phénomène bien fondé)でしかない、という。ハルツによれば、物体が実体の多であるというのは實在論の主張で、物体がよく基礎付けられた現象であるとは観念論の主張であり、この箇所ではライプニッツ自身が観念論と實在論を混同し矛盾を犯しているとされる。しかしこの説明は、ライプニッツのテキストを矛盾なく読み解こうというハルツの当初の目論見に反してしまうのではないだろうか。

第四にハルツが實在論に属すると考えている主張のあるものは、観念論的な立場に従っても説明することができる。例えばハルツは、物体がそれを構成するモノイドから派生した實在性(realitas)をもっているという主張は、實在論に属するもので観念論の体系とは両立不可能だとしている。だが、物体が精神に依存した存在者であるという主張と物体が精神から独立した實在性をもつという主張が整合的に理解されうること

がドナルド・ラザフォードによって示唆されている。ライプニッツはアルノー宛書簡で一性と存在が置き換え可能であるものとしており(G2 97)、実体の集合体の一性がそれを一つのものとして表象する精神に依存したものであるならば、集合体の存在もまた精神に依存したものであるということになるだろう。しかし一方で、ライプニッツは実在性のあるものにより直接的に要求されるものとしている(Rd p. 162; A VI iv 990)。そうすると、物体ないし集合体の実在性が多くの外的なモナドに存するという主張も理解されうる(G2 261-2, 267)。これらのモナドは集合体の構成員であり、集合体の形成にあたりまさに直接的に要求されるからである。当然のことながら、多くのモナドなしに集合体を形成するのは不可能である。そして、集合体の実在性はこれら外的なモナドに存し、表象主体からは独立しているのである。

以上を考慮すると、ハルツの解釈に直ちに従うのは性急である。確かにダニエル・ガーバーは、1680年代にライプニッツが魂と身体とを備えた動物を物的実体(substantia corporis, substance corporelle)として認めるか否かについて迷いをみせていたことを指摘している(Ga pp. 267-301)。そしてライプニッツは、もし物的実体が存在しないとすれば、物体は現象にすぎないだろうと論じていたという。ライプニッツが二つの場合をともに考慮していたとすれば、1680年代における主張のあるものは物的実体が存在することを前提としており、他

のものは物的実体の存在を前提とせず物体をもつばら現象として扱っているものと考えられるかもしれない。しかしそれは、1700年代以降にライプニッツが整合的な体系を提示していたと考えることと矛盾はしない。1712年以降のデ・ボス宛書簡で語られる実体的紐帯をライプニッツ自身の体系に組み込むべきか否かという難問は残るが、我々はライプニッツの後期のテキストを整合的な体系を提示したものとして解釈する努力を続けるべきである。

#### 略号

- A = *Sämtliche Schriften und Briefe*. Herausgegeben von der Deutschen Akademie der Wissenschaften zu Berlin. Darmstadt, 1923 ff., Leipzig, 1938 ff., Berlin, 1950 ff. Cited by series, volume, and page.
- G = *Die philosophischen Schriften von G. W. Leibniz*. Ed. C. I. Gerhardt. Berlin: Weidmann, 1875-1890. Reprint, Hildesheim: Georg Olms, 1978. Cited by volume and page.
- Ga = Garber, Donald. 2009. *Leibniz: Body, Substance, Monad*. Oxford University Press.
- Rd = Rutherford, Donald. 2008. "Leibniz as Idealist" *Oxford Studies in Early Modern Philosophy* 4: pp. 141-90.